

# サオシュヤントについて

伊 藤 義 教

サオシュヤント saošyant- はゾロアストラ<sup>1)</sup> 教徒の聖典アヴェスターにはガーサー以来見えている古いことばであるが、その概念は、ゾロアストラ教の後期の伝承とガーサーとは、非常な相違を見せている。語形そのものは sav-/su- 「利益する、扶助する」の未来分詞であるから、それは「利益、扶助するであろう者」という意味の語である。

さて、ゾロアストラ教後期の伝承によると、ゾロアストラ出現の千年紀ののちに、三つの千年紀がつづくが、その各千年紀にひとりずつ、ゾロアストラの子が出現する。その出現の様子は、ゾロアストラの精液が9999柱のフラワシに守護されながら、カンス海<sup>2)</sup>に保存されているが、時機到来すると、少女が水浴してみごもることになる。一種の処女懐胎である。こうして生まれてきても、かれらはオーフルマズド（アフラ・マズダー）の使徒としてこの世界に遣わされたものである。かれら三子はウシュエタル Ušētar, ウシュエタル・マーフ Ušētar-māh, およびソーシュヤンス Sōšyans（またはソーシャンス Sōšāns）という。みな中期ペルシア語形で、よみ方次第では、このほかにも、多少の差異を呈するが、ここではこのよみ方でゆく。かれらの千年紀には奇蹟がつきもので、それぞれ、十日十夜、二十日二十夜、三十日三十夜の間太陽が中天に静止するなどがそれで、またかれらの行う奇蹟としては、前二者はそれぞれ三年間および六年間草木に緑色を付与したりするが、なかでも、最後のソーシュヤンスは死者を復活させ、永生の善の世界を顕現させるために、協力者（男女十五人ずつより成る）とともにもろもろのわざを行う。

ところで、これら三者のうち、ウシュエタルにはアヴェスター語形ウクシュヤト・ウルタ Uxšyaṭ.ərēta 「天則を榮えさせるもの」、ウシュエタル・マーフには同じくウクシュヤト・ヌマフ Uxšyaṭ.nəmah 「崇敬（アフラ・マズダーへの）を榮えさせるもの」という原形があるが、ソーシュヤンスの場合は原形はアストワト・ウルタ Astvaṭ.ərēta 「象をそなえた天則、天則の権化」であるから、全く別の語である。ソーシュヤンスと

は、実は、冒頭に記したサオシュヤントの中期ペルシア語形で、本来からすれば、それはこの三者の汎称（後期の伝承での）にほかならない。だから、第一の終末論的ソーシュヤンスがウシュータル、第二のそれがウシュータル・マーフなのである。そして第三ソーシュヤンスは殊に重要なわざを行うもの、すなわちソーシュヤンス中のソーシュヤンスとして、ソーシュヤンスの名を独占するのである。要するに、後期伝承ではサオシュヤント（ソーシュヤンス）は三人に限られ、いずれもゾロアストラの子とされ、なかでも末子がサオシュヤントの名（ソーシュヤンスなる形において）を専有するようになった。そして、いずれもが終末論的舞台上に登場するということになる。

これに対し、アヴェスターではどのようにになっているかという点、ガーサーとそれに近接せる諸篇を除いて取扱ってみると、後期の伝承に発展しうる素材を提示していること、そしてそれはガーサーやそれに近接せる諸篇とは、すでに大きな隔たりをみせていること、などが注目される。Yt.<sup>3)</sup> 13では多くのゾロアストラ者の名をあげてそのフラワシに崇敬をささげるので、おびたしい人名が登場する。そうしたなかで § 128 では九人の人名をならべ、その第七、八、九番目が、それぞれ、上記したウクシュヤト・ウルタ、ウクシュヤト・ヌマフ、およびアストワト・ウルタとなっている。三つの千年紀に出現するとか、ゾロアストラの子で互いに兄弟であるとかの表示はないが、かれらがリストの末尾を占めていること、アストワト・ウルタの前に六友（第一～第六まで）がリストされていることは注目されてよい。なにゆえなら、ソーシュヤンスにも男女の協力者があることは上述したとおりだからである。そして、かかる意味から、さらに注目すべきは §§ 141～142 で、十一人の少女をリストし、しかもその最後にランクされているものはウルダト・フドリー *Urdat.fəðri*、またの名をウィスパ・タルワリー *Vispa-taurvairi* という。なぜなら、かの女は人天より発する障碍を「ことごとく (*vispa-*) 征服する (*tar-*) 者」すなわち、アストワト・ウルタを生むからである (Yt. 19<sub>92</sub> 参照)。しかし、かの女の前にランクされている二少女と、ウクシュヤト・ウルタおよびウクシュヤト・ヌマフとの関係はなにも言及されていない。そのほか、§ 62 には 999 99 柱のフラワシによってゾロアストラの精液がカンス海に保護されているとあり、Yt. 19<sub>92</sub> や Vid. 19<sub>5</sub> にはアストワト・ウルタがそのカンス海から出現すること、また Yt. 19<sub>10,89</sub> にはかれが協力者の協力によって終末の作業を行うことが見えている。これらの文面のみからすれば、終末論的サオシュヤントはアストワト・ウルタのみに限られていて、その前に出現する問題のふたりは、極言するなら、一介のゾロアストラ者にすぎないと云いうる。もちろん、Yt. 13<sub>128</sub> から第一、第二、第三サオシュヤントの存在

を推測することも可能である。いずれにしても、これらのアヴェスター伝承にみられる特色は、サオシュヤントを終末論的に位置づけている点と、第三サオシュヤントが決定的役割<sup>4)</sup>を付与されているという点で、後期伝承とその軌を一にしていると言えるであろう。

ところが、われわれがひとたび眼をガーサーに移すと、そこにみえるサオシュヤントは、非常に異なった環境におかれていることを見いだすであろう。単数で在証されるのは Y. 45<sub>11</sub>, 48<sub>9</sub>, 53<sub>2</sub>, で、複数では Y. 34<sub>13</sub>, 46<sub>3</sub> および 48<sub>12</sub> である。

まず単数で登場する Y. 48<sub>9</sub> をみると、ゾロアストラは「脅威をもってわたくしを脅している者を御身マズダーがよく制し給うかどうかを、いつ、わたくしは知ることになるでしょうか。……サオシュヤントたるものは、身にいかなる報応があるかを、知りたいものです」と、アフラ・マズダーに訴願している。ここでは、ゾロアストラがみずからをサオシュヤントと称している。同じ単数の在証される 45<sub>11</sub> では、人・天にしてアフラ・マズダーを侮念するやからをよく侮念する者は、サオシュヤントや家長によって盟友、兄弟あるいは父とみなされるであろう、といている。サオシュヤントは家長とともにこの地上に現在する、または現在しうる人格である。バルトロメーはこのサオシュヤントをもゾロアストラと同定しているが、理由のないことではない。サオシュヤントのかかる性格を最もよく示しているものは 48<sub>12</sub> で、それによると、天則に合致した行動をとって、敬虔な心から、アフラ・マズダーの神意をよく満足させるなら、そういう人びとは魔アエーシュマの打倒者として使命づけられたものであるから、諸邦にあって、よくその地のサオシュヤントとなるであろう、とゾロアストラは言っている。かかるゾロアストラには、天則の世界を実現するために、かくのごときサオシュヤントたちが、かれと協同してくれる日がしきりに待望される (Y. 46<sub>3</sub>)。かかるサオシュヤントたちは正見の人として、主が正見の人に果報として約束した在天の至福に、天則の道をたどって、到達するのである (Y. 34<sub>13</sub>)。このようにサオシュヤントは、時にはゾロアストラ自身であったりするが、またかれと協力してその教えの尖兵となって活動する人びとのことでもある。サオシュヤントはゾロアストラとなんらの血縁関係をも有せず、一定の条件を充たせばだれでも取得することのときの資格であり (48<sub>12</sub>)、従って、かかる点において、それはヤシュトや後期伝承におけるがごとき、主によって遣わされた使徒でもなかった。

このようなサオシュヤントの原初性格は、ガーサーに膚接する時代には、そのまま保持されている。ガーサー中の終章 Y. 53 の §2 では、カウィ・ウィーシュタースパ Kavi

サオシュヤントについて

Vištāspa 王やゾロアストラの子スピターマ Spitāma, それにフラジャオシュトラ Frašaoštra といた人物が, サオシュヤントたるゾロアストラの遺法のために協力することを, つぎのように要請されている:

されば, マズダーを充ち足らわせることと, 札讃のためにすすんで崇敬し奉ることに,

かれ(ゾロアストラのよき教法)のころとことばと行いとをもってこれ従うてほしいのは

カウィ・ウィーシュターSPAとザラスシュトラ(ゾロアストラ)の子スピターマ, ならびにフラジャオシュトラで,

(かかる人たちが)サオシュヤントのものとしてアフラの創成し給うたかの<sup>ダエーナー</sup>教法のために至直の道をしきながらです。

また, 初期ゾロアストラ教徒のフラワラーネー Fravarānē 告白文にも

……ザラスシュトラのなし給うた<sup>えらび</sup>選取, フラジャオシュトラとジャーマースパ Jāmāspa 両所の選取, (アフラの御所望を)実現する義者たるサオシュヤントたちいずれもの選取——この選取と約束にならって, わたしはマズダーをまつものです。

とある(Y. 12<sub>1</sub>)。「七章のヤスナ」(Y. 35~42)にはサオシュヤントは見いだされないから今は触れないが, そのほかにもサオシュヤントの原初性格を保持している個所がいくつかある(Y. 70<sub>4</sub>ほか)。しかしガーサーをはなれることが年代的に遠くなるにつれて, ステロタイプ式なフォーミュラのなかにも登場し, その原初性格も生気が褪せてくる一方, 先述したヤシュト的=後期伝承的な要素が鮮烈に浮かびあがってくるのである(Y. 9<sub>2</sub>をも参照)。

そうすると, かかる原初的サオシュヤントがヤシュト的サオシュヤントを経て後期伝承における三サオシュヤント(ソーシュヤンス)となって展開するに至った契機や経緯には, いかなる事情が伏在していたのであろうか。ここではこれについて, 二つの方面から, 解答を与えておこう。一つは saošyant- なる語そのものが示すように, それはもともと未来に関連を有しているものである。未来とは, いうまでもなく, 終末論的な意味において理解すべきものである。もう一つは, ゾロアストラにおいては, その未来すなわち「世界の終末」はかれの存命中に, もっと極言するなら, あるいは明日にでも到来するかもしれなかった, ということである。この時機がいつかについて, かれは, ついに, アフラ・マズダーによって指示されなかった。

いま、各自が死後、生前の行為に応じて享受する世界——最勝界と悪界——の別を決定される一種の裁判を個別裁判と名づけるなら、ガーサーには、そのような裁判のほかにも、もう一つの裁判があったと考えられる。もっとも、個別裁判は一審制で、ひとたび悪界に墮したものは永久に出期がなく、その反対に、最勝界に赴いたものは永遠に福を享ける。そうすると、個別裁判のほかにもう一つ存する裁判とは、かかる個別裁判の対象とならなかった全庶類を対象とするものでなければならない。言うならば終末裁判とでも称すべきこの裁判は、正邪善悪を裁判して賞罰を定める点においては、個別裁判と同じものであるが、終末裁判は善悪混淆の世界に最終的決定的分離をもたらす点において個別裁判とは異なるものである。終末裁判は、死者を対象とする個別裁判とは事わかり、生存している全庶類（人・魔を含めて）を対象とする。しかもそれは、後期伝承にみられる終末裁判とは本質的に異なるもので、後期伝承のそれは実は裁判ではなくして罰をきよめるための祓浄の儀礼にほかならないのである<sup>5)</sup>。このような終末裁判にゾロアストラ的サオシュヤントは関与し、このような後期的総祓浄式にソーシュヤンスは関与するのである。ともに終末論的な存在ではあるが、差異のあることも否めない。

思うに、ゾロアストラすでに歿し、待望庶幾された終末の期もいまだ到来しないとすれば、これをさらに後代に期するほかはなかったであろう。そこへ、ハカーマニシュ帝国の出現を見るようになった。この政治勢力に、近い終末を云々することは、憚られたであろう。ヤシュト書編集の時期をこの帝国時代におこうとする説が行われているが、そのヤシュト書にサオシュヤント=アストワト・ウルタが登場していることは意義深いものがある。ハカーマニシュ朝大王の正邪に対する授賞加罰の精神は、法行為としても、ガーサーにみえる個別裁判と軌を同じくする。ヤシュト書にみえるアストワト・ウルタの役割（註4参照）にもそれがうかがわれるようである。残念なことに細部が審らかでないが、かれは邪悪を駆逐破碎してのちに全庶類を永生不死ならしめるのである。そしてかれの名前 Astvač.ərətā 「象かたをそなえた天則」についてみるに、ゾロアストラは世に天則かたが象かたをそなえて力あるものとなることを、アフラ・マズダーに訴願している（Y. 43<sub>16</sub>）。開祖におけるこの願いがアストワト・ウルタの名において擬人化され、かつ、開祖の子として、遼遠な未来に延長されたと考えても大過ないであろう。

サオシュヤントの問題は旧約聖書におけるメシア、仏教における当来仏弥勒と、比較宗教史的に、宗教思想史的に、あるいは宗教現象学的に、課題を提供しつつしてきたものである。弥勒（マイトレーヤ——この名はミトラの派生形）は、イコンとしては水瓶をたずさえて表現されてもいるが、水との関連を単なる灌頂の意でなしに、あるいは原

質としての水でなしに、メソポタミア的観念において受けとるならば、その水は生命の水<sup>6)</sup>であり、サオシュヤント=アストワト・ウルタも「カンス海」から出現する。そしてかれは終末のわざを協力者たちと協同して行うが、かかる舞台における役割が、実はミスラ神にも割当てられていることは特筆されねばなるまい。中期ペルシア語書では大幅に後退しているが、ギリシア・ラテン作家によると、かつてのミスラ神の終末論的役割は、アストワト・ウルタのそれと、ほぼ同じものであった<sup>7)</sup>。従って、かかるミスラを捉えて弥勒(マイトレーヤ)と比較することは、たしかに、課題たるを失うまい。しかし、両者の関係は、これを肯定するにせよ否定するにせよ、仏教史の側でまず解決されねばならぬいくつかの問題をかかえているように思われる。

筆者はこの小論を結ぶにあたって、ゾロアストラ的・ガーサー的サオシュヤントとは、もっと具体的に言って、そもそもいかなるものであるかを、より明瞭に定義しなければならない。筆者は、これを、ゾロアスーラ者的祭司と解するものである。ゾロアストラにおいては、反ゾロアストラ的祭司をも含めて聖職一般を指称する語は、見いだすことができない。反ゾロアストラ的祭司は、より限定的に、カラパン *karapan* とか、ウシグ *usig* とかの呼称をもってよばれている。ゾロアストラにおいては、反ゾロアストラ的祭司は祭司でもなく、聖職でもなかった。かかる筆者の見解は、職能階級的分類のガーサー的表現として今なお支持者を有する一連の語ウルズーナ *varəzāna*、クワエートウ *xʷaētu*、およびアルヤマン *airyaman* との関連ばかりでなく、「七章のヤスナ」成立の年代、あるいはその比較年代との関連にも及んでくるが、その他の諸問題をも含めて、それらは別の機会に待つほかはなくなった。

(筆者は本誌編集部員)

#### 註

- 1) 正しくはザラスシュトラ *Zaraθuštra* であるが、本論では多くこの通形によった。
- 2) *zrayah Kāsaōēm* 「カンスの海」とか *āp Kāsaoyā* 「カンスの水、湖」などと言われている。*Kāsaoya-* は \**Kāsu* 「カンス」から派生した形容詞。中期ペルシア語形はかなり崩れているので、ここではこのアヴェスター語形のみを用いることにする。東イランのハームーン湖に比定されている。
- 3) 略記号は *Yt.* = *Yašt*, *Vid.* = *Vidēvdāt*, *Y.* = *Yasna*。言うまでもなく、*Y.* 28–34, 43–51 および 53 の計七章がガーサー。ただし、そのうち *Y.* 53 はゾロアストラ歿後の成立。
- 4) アストワト・ウルタの役割は不義の魔ドルジを駆逐打倒し、ついで全世界をその「眼」で

不死にするにある。訳出すれば「マズダー・アフラの使徒=ウィスバ・タルワリーの子=フストワト・ウルタが、勝利の武器をふるいながら、カンスの湖から出現するとき、……かれは天則の世界から、これをもって、ドゥルジ（不義）を逐攘うであろう。かれは霊力の眼をもって見るであろう、かれは悪性不義の世界の一切庶類を看視するであろう。かれは、有象の全世界を乳酪の眼をもって看るであろう。そして看ながら有象の全世界を不死にするであろう。善思・善語・善行・善ダエナー者にして、おのが舌をもっていかなるときにも虚言することなきものどもたる、勝利者アストワト・ウルタの友たちが出で来たであろう。かれらの前に、血塗れの棍棒・悪しき栄光をおびるアエーシュマは叩頭するであろう。（かくして）天則は……悪しきドゥルジを征服するであろう。」とある（Yt. 19<sub>92-95</sub>）。眼の力に対する信仰はきわめて古く、Y. 31<sub>13</sub>でもアフラ・マズダーが眼の光りをもって一切を看視することがみえている。さらに、よい眼、わるい眼に関する信仰伝承も、イランの古今を通じて、かわらない。これは大宇宙と小宇宙（人間の身体）との相似を主張する世界観から来ているもので、それによると、頭は無始光天やガロードマーン Garōdmān 天とって至上天を形成するものに相当し、これに対し、両眼は太陽と月になぞらえられる。至上天が真の光源となるように、眼も脳髓の光を出してもものを見るわけで、邪悪な人間の眼が忌避されるのは邪光を放つからである。

- 5) 世界の終末を最も精叙しているのは中期ペルシア語書「広本ブンドヒシュン Bundahišn」（略本には欠けている）。それによって必要事項のみを示すと、ソーシュヤンスは57年かかって善悪一切の死者を「起ちあがらせる」（命終した地点かその至近の場所にて）。ついで、かれらは、さまざまな手順を経て、相互に他を認識しあうようにされる。イーサトワーストラーン Īsatvāstrān 集会（詳細は不明）が催され、各人はそこにておのが善悪の行爲を見、また義者は不義者から区別され、前者は最勝界、後者はふたたび悪界に赴き、それぞれ三日三夜の賞・罰をうける。このつぎに、テキストは最も注目すべき記載をみせている、すなわち、火神と神エールマン Ērman は山岳中の鉱物を熔かして全地に用と流し、人は、義者不義者の別なく、すべてこれを通過して清められる、とあり、さらに、この熔鉱は悪界にも流下してこれを清める、とある。そののち人類はもう一度、最大の相互愛をもって集合する。かれらは、ここにおいて、同一の言語をはなし、神々に讃辞をささげ、オーフルマズドのわざはここに完了する。ソーシュヤンスは協力者たちとともに祭儀を行い、霊牛ハーターヨーシュ Hātīyōš を屠ってその脂と白ホーム hōm（ハオマ haoma）とでアノーシュ Anōš（不死の液）をつくり、全人に飲ませて不死にする、とある。ここに見られる転悪成善のドクトリンは修祓の儀礼ともいべきもので、ガーサーの教義とは根本的に相違する。
- 6) 生命の水については G. Widengren: *Mesopotamian Elements in Manichaeism* (King and Saviour II). *Studies in Manichaean, Mandaean, and Syrian-Gnostic Religion*, Uppsala-Leipzig 1946, p. 119 以下 *passim*.
- 7) ギリシア・ラテン語著作家たちによると、ミスラ神は死者を起ちあがらせ、終末論的屠牛供犠を執行し、熔鉱の熱火をも誘起するので、死者の魂を裁きかれらを懲罰するものとしての役割を付与されていることになる (F. Cumont: *La fin du monde selon les mages hellénisés*, *Revue de l'Histoire des Religions*, 1931, p. 29 ff.)。